

Title	新渡戸稲造の世界：その植民地観をめぐって
Author(s)	鵜沼，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10：253-273
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4939
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

新渡戸稲造の世界

——その植民地観をめぐる——

鵜 沼 裕 子

はじめに

一般に何らかの宗教的信念を生根拠とする者の生き方は、その宗教が真理として公認する教義によつて方向づけられるので、個々の思想家の世界は、これを根源とする内的構造連関のもとに理解すべきであろう。しかし私は、客体化され普遍化された教義よりも個々のキリスト者の軌跡の上に見いだされる宗教的原体験、及びそこから形成された宗教的信念の方が、彼の生き方を方向づける原点としてより、重要な意味を持つであろうとの考えから、キリスト者たちの諸活動を、この体験を源泉として押し出され、全体的に有機的なつながりの内にあるものと理解して、彼らの世界を再構成することを試みてきた。

新渡戸稲造の場合に即して言えば、教育、国際政治、植民地政策、官人としての働き、さらには東西諸思想の研究など、極めて多方面に及ぶ彼の活動や業績は、彼の特異な宗教的信念を核として押し出され、全体として固有のつながりのうちにあると考える。そのような方法的視点から見ると、例えば新渡戸の植民地観は、一見すると全く異なる分野に

属するかに見える彼の民俗学的関心と、彼の精神の深部において構造的な関連の内にあることが見えてくるのである。従つて、官人としての新渡戸の活動、とりわけ植民地関連の彼の言動について言及する場合、一方的かつイデオロギッシュな裁断に陥らないためにも、こうした研究の視点を持つことが重要ではなからうか。そのような見方は、新渡戸の植民地観に対する「誤解」を払拭し、彼の意図したことの正当な理解と評価につながるであろうと考えるからである。そこでまず、新渡戸の生き方の基盤となつている信⁽¹⁾のあり方の特質を素描することから始めたい。

1. 神秘家的資質

「新渡戸稲造」を同時代の他のプロテスト・キリスト教思想家たちと比べると、そこにはある種の異質性が感じられるのではなからうか。それはひとつには、彼が伝道を本務とせず官途に就いた人であつたことによるであろうが、その異質性の所以をさらに彼の精神の内奥に探るなら、第一に、これ自体は周知のことであるが、彼に一種の神秘家的な資質があつたことをあげたいと思う。新渡戸夫人マリ子が夫稲造を「相当の神秘家」と評していたことはよく知られているが、彼は生涯にわたつて、いわゆる心靈現象のようなものも含めた超常的な世界に深い関心を寄せていたようである。『東西相触れて』の中の「靈的の現象」（『新渡戸稲造全集 第一巻』に収録。以下『全集第〇巻』と略記）と題する一文は、「我輩は幼い時から迷信的に一種の靈力を信じてゐた為に、学生時代には折々友人の物笑となつた」と書き出され、そこには、ボストンで占い師、骨相・手相見、予言者などを訪ねてまわり、「彼等の言ふことが何れも一致してゐたことに少なからぬ興味を覚えた」り、ロンドンでは「降神術者の秘密会合」に出席して異常な体験をしたことなどが、かなり微細にわたつて紹介されている。また後年、国際連盟知的協力委員会を通じて知り合つた、イギリ

スの古典学者で超能力の所有者とも言われたギルバート・マレーや、哲学者ベルグソンらともこの種の問題について語り合ったことがあるという。またこれも周知のように、「神の声」を聴いたというジャンヌ・ダルクへの新渡戸の心酔ぶりには並々ならぬものがあつたようで、その生地やゆかりの地を訪れている。さらに、これも広く知られるところであるが、晩年には、靈感による予知能力を持つといわれた曹洞宗の尼僧・佐藤法亮と深い親交があつた。

もうひとつ、新渡戸自身の書き物から一例をあげておきたい。『編集余録』（原英文・EDITORIAL JOTTINGS『全集第十六巻』、邦訳は同『第二十巻』に収録）と題する文集は、一九三〇年から三三年の死の当日に至るまで執筆され、『英文毎日新聞』に掲載された短文集で、新渡戸がカナダ・ヴィクトリア市のジュビリー病院で客死したのちも、なお数編の原稿が新聞社に届いたというものである。新渡戸の得意とする人生雑感風の随筆で、内容は人生万般の事柄に及んでいるが、この中に、新渡戸の前にしばしば現れて語りかける、オキナ（Okina）と呼ばれる謎めいた老人が登場する。彼は新渡戸より一五歳年上の友人という設定であるが、佐藤全弘氏も言われるように、新渡戸自身の分身、心理学者のいういわゆる二重身・ドッペルゲンガーであることは間違いない。オキナが登場するシーンには、常に被膜に覆われたような非現実感が漂い、新渡戸はオキナの語りというかたちで彼自身の心の深層にある思いを吐露したものと思われる。にもかかわらずオキナの言うことは、新渡戸にとつて常に謎であり、いつも新渡戸を惑わせる。すなわち、普段は理性の覆いのもとにあつて自分自身にさえ隠されている心の深奥が、時折自ずと湧き出て、オキナの口を借りて語りだすとも言えようか。以下は、死の約二か月前の日付（一九三三年八月四日）のある「オキナのつぶやき」と題された文章の一部である。

オキナのために永年家のきりもりをし、オキナの癖や奇行を知りつくしているある老婦人が、オキナはだれも側にいないと思うと、不思議な行為にふけつて私に告げてくれた。

オキナがつぶやいていることばは、その婦人には独り言のように聞こえたが、オキナにとつては対話にちがいがなかった。オキナのつぶやきは、いつも全部聞こえるわけではないが、数日前、とぎれとぎれにこんなことを話しているのが聞こえたという。

「永く待たせてすまん……。すぐそちらへ行く……。もうこれ以上ここにいる気はしない……。今や真暗闇だ……。一点の光も見えぬ……。霊で武装した勇敢な兵士らを送ってくれ、心に真実を秘めたまことの古きサムライたちを……。にせものは駄目だ……。」（『全集第十六巻』、五〇二―五〇三頁）

佐藤全弘氏は、オキナの対話の相手は三年前に死去した新渡戸の畏友・内村鑑三ではないかと述べておられる。またこの時代背景には、ナチス・ドイツの政権獲得、日本の国際連盟脱退という世界の動きがある。新渡戸は近づく自らの死の予感の中で、第二次世界大戦前夜の世界の黙示録的な光景を幻視しつつ、すでに他界の人となっている内村を相手に、自己の心の深奥を独白したのである。一種の不気味ささえ感じさせる、鬼気迫る文章ではなからうか。

一般に近代日本の代表的なプロテスタントたちは、啓蒙的理性が容認する普遍的な真理を至上かつ唯一の判断基準として尊重し、そこに収まりきれない「あやしげな」ものは、前近代的な迷妄の残滓として切り捨て、蒙昧な世界から脱出して「理性の光」の下に身を置くことをもって新しい神への帰順の証とした。従って新渡戸に、「常ならぬもの」への浅からぬ関心があり、しかも彼自身、それに対して決して抑制的でなかったことは、彼の信仰の特質として留意しておくべき重要なポイントであると考ええる。

では新渡戸自身には、信仰生活の上で何らかの神秘的な宗教的原体験があつたのであろうか。新渡戸に対する一般的なイメージは「円満な国際派の良識人」であり、大方の伝記的な史料もそうしたことについては多くを語っていない。ただ一伝記記者は、新渡戸一八歳の年の日記に記されている「父の光を見た」という一節に注目し、これを新渡戸

の「初めての靈的体験」と特筆している。⁽³⁾ただしこの「光体験」を、パウロの「ダマスコ途上の回心」に比せられるような、人生にとって決定的な転機となった体験と受け止めるのは無理ではないかと思われる。しかしながら、新渡戸の生来の神秘的資質とこうした特異な体験は、彼の信と行動を考える上で無視できない特質であり、数年後に「内なる光」を説くクエーカー主義と出会ったときにこれと呼応することとなる。そして神秘の世界への関心は、クエーカー主義者新渡戸の中に生涯にわたって生き続けたと考えたい。

ここで、新渡戸のクエーカー主義の理解についての私見を述べておきたい。同主義について彼は次のように述べている。クエーカーの教えの出発点は、すべての者に照射される「内なる光」の存在を信じることにある。「内なる光」には「種子」、「声」、「キリスト」などさまざまな名が与えられているが、名称が何であれその意味するところは、全ての者には我ならぬ力、人間を超えた「人格」(Personality) が内在しているということである。これはクエーカー主義の創始者・J・フォックスが初めて創出したものではなく、神秘主義の発祥とともに古くから存在し、神秘的な魂の持ち主であれば、誰にでも生じ得る考えである、と。

一方、信仰について彼は次のように言う。「人が、未来のことであれ過去のことであれ、現世を超えた自らの存在に關して信じることが、その人の信仰をかたちづくるように思われる。」ここで注目したいのは、「現世を超えた何ものかの存在」(を信じること)ではなく、「現世を超えた自らの存在」(傍点・引用者)について信じること」と言われていることである。すなわちここでは、人は現実世界のみに生きるものではなく、時にそれを超え出る存在でもあるとされているのである。新渡戸の念頭にある「現世を超えた世界」とは、新渡戸が折に触れてさまざまなかたちでその実在を体験し、生涯にわたってそれに対する飽くなき関心を抱き続けた神秘の世界・超常的世界と通底するものでもあったと考えたい。新渡戸において人間は、超現実的な世界と交感し得る存在であり、神はそのような仕方によって体験される存在なのであった。従って新渡戸にとつての信仰は、正統的キリスト教におけるように、現実世界を超絶した絶

対者と個の対峙において成り立つ営みであるよりは、神秘の世界に与る者として神と直接に交感する体験であつたと考へる。（『日本人の宗教観』、『全集第十五卷』に収録、邦訳は、同『第十九卷』）

なお、ここでは詳論はしないが、クエーカー主義一般がそうであるように、新渡戸の場合も神秘主義への志向は現世からの隠遁、脱俗というかたちをとらず、日常的な活動の中に神の聖旨を生かし込む、という方向に向かつた。超現実的世界は、世界観の構図としては現世の彼岸に属している。しかし、人が「現実を超えた存在」であり、「内なる光」によつて「超現実的世界」と感応することにより、二つの世界は互いに交感する。「超現実的世界」と現実とは、論理的には次元を異にするが、人が「内なる光」に照射されて神的存在の意志を体现することにおいて、両者は実践的に交流する。言い換えれば、人は「実行的神秘主義」の担い手として生きることによつて、「超現実的世界」と現実との懸け橋となり得るのである。これが新渡戸の信の世界の構造であつたと考へる。

2. 民俗的なものへの関心

彼の世界の特質を示す第二の点として、民俗的な世界への関心があつたことについて触れておきたい。神秘的なものとともに民俗的なものへの浅からぬ関心も新渡戸稲造の世界の顕著な特質であり、「はじめに」においても触れたように、これは植民地に対する彼の考え方と密接なつながりを持つと思われるので、植民地問題に関する新渡戸の見解を読み解くためにも、この側面の考察は欠かせないと考へるからである。

ここでまず新渡戸の「田舎観」について彼自身の文章に聴こう。

「地方ぢかたの研究」（『全集第五卷』に収録）と題する文章で、彼は次のようなことを述べている。近時、各国の交通機関

の急速な発展は都会の著しい繁栄をもたらしたが、その一方で「田舎が段々度外視せられるやうに成り行くのは、大いに憂ふべき事である」。新渡戸は、都会の急速な発展の裏で田舎が次第に衰退していくことを危惧するのである。日本が国を挙げて近代化の推進に力を傾注し、大方のプロテスタントたちも、田園や自然を賛美しつつも「都会」をもつて近代化の象徴と考え、そうした世の動向を神意の指し示す方向と考えていた時代に、新渡戸が都会よりも田舎に思い入れをもっていたことは注目に値する。ちなみに植村正久が「都と田舎」（『植村正久著作集7』新教出版社、一九六七、八一―九三頁）というよく知られた説教で、両者の長短をあげつつも、「私は妙です。自分の心をいうと田舎より都会が好きです」と述べていることを思い合わせると、同世代のキリスト者である両者の、生に対する姿勢の根本的な違いを窺わせるようで興味深い。

では新渡戸は、どのような理由で都会よりも田舎を好んだのであろうか。彼は、都会人は田舎人に比して根が浅く身体も柔弱で、才気はあるが地に根を下した落ち着きがないと言う。さらに彼は、都会と田舎の子どもを比較して次のようなことを述べている。「都会の子供は伶俐なり。然れども物事を遣り徹す信念が薄い。田舎の子供は之に比すれば鷹揚で、言はゞ小馬鹿である。然れども信念の堅い所がある。」

では、田舎人のこうした気質は何に由来するのであろうか。新渡戸はブラドレーなる人物の言葉を引いて言う、「田舎にては生命あるものに接すれども、都会にては然らず」と。都会では五官に触れるものは全て人工的であり、人と接する機会は多くても、その交わりは浅く、「殆んど物質的」でさえある。これに対して田舎では、人は山川草木や動物など、活きた自然と直接に交わることができる。新渡戸は、近代化された反面、即物的になつた都会よりも、未だ人手の加わらない、生命に直に触れることのできる田舎を愛好したのである。生命あるものに直接に接することのできる田舎は、物に触れて感興を促され、自ら考える力を育てる。故に「都会には小才子が沢山出来るかなれども、優れた人物は田舎にしか出ない」。そして、田舎の衰微は単に農業の衰退をもたらすばかりではなく、「人間の品格を高くする事が

出来ず、又た自治制の発達も出来ぬ」とまで述べている。そして田舎へのこうした親近感は、「決して田舎を度外視せず、田舎に対する趣味と同情とを養ふて、……之れを科学的に研究せんと欲するのである」という、田舎に対する学問的探究心へと展開していくのである。新渡戸にとつて「田舎」とは、人為的に加工される以前の、人間の生にとつて真に必要な社会の原初的なありようを残す宝庫でもあったのである。

このようにして「田舎」に対する新渡戸の思い入れは、その「科学的」な「研究」、すなわち彼が「田舎学」とも呼ぶ「地方^{ぢかた}の研究」へと発展していく。そこで、ここで新渡戸における「地方学」について若干触れておきたい。

地方はヂカタと訓みたい。元は地形とも書いた。しかしヂカタは地形（ちけい・引用者）のみに限らず、凡て都会に対して、田舎に關係ある農業なり、制度なり、其他百般のことに就きて云へるものにて、夫れを學術的に研究して見たい考で、謂はゞ田舎学とも称すべきものである。

このように述べつつ新渡戸は、旧家や村役場などの記録や古老の話などを収集・保存しておくことの必要性を強調する。そして、都市化の急速な進展の裏で地方学の対象そのものが消滅していくことを憂慮して、「今にして我が「地方学」の研究に尽瘁するなくむば、絶を紹ぎ廃を免するの効、復た収むべからざるものあらむとす」（『全集第二巻』二四一頁）と警鐘を鳴らしている。

新渡戸の関心の具体的な対象は、村落等の地名の由来に始まり家屋の建築様式、土地の分割法、方言など、彼自身の言葉通り田舎に関する百般のことさらに及んでおり、時にドイツの事例などもあげながら、これらの旧事から明らかにするそれぞれの土地の歴史や文化に説き及んでいる。新渡戸は人間の生き方に関しても、理論や思弁よりも現実に即した体験知を重んじたが、そのことと呼応してここにも、体系化されその意味で抽象化された近代的な学問知よりも、あ

くまでも個々の事実に密着した知を重んじる新渡戸の思考態度の特質を読み取ることができるであろう。しかも彼の関心は、同時代の大方のプロテスタント思想家たちとは趣を異にして、近代化の最前線に関わる知見よりも、むしろ「辺境の地」に深く根を下ろして生き続ける生活文化の実態に向かつていたのであった。

ところで、地方に対するこうしたまなざしは、まさに民俗学的関心というべきものであり、柳田國男の民俗学とも重なり合う質のものであった。家族・親族・村落・衣食住・年中行事・信仰や芸能など、およそ民俗学の対象となり得るものは、すべて新渡戸の関心の対象となった。新渡戸自身は実際にこうした関心を学問として深めることはなかったが、先に言及した文章では、「田舎」に関する事象百般を「学術的に研究して見たい」という気持ちを披歴している。そしてその希望は、日本民俗学の祖・柳田國男と実際に交流を持ち、彼の仕事を傍らから支えるというかたちである程度実現したと言つてよいであろう。

そもそも柳田國男によつて基礎が据えられた日本の民俗学は、近代化によつて消滅しつつある民俗を記録に残すことを当初の目的としたが、柳田の死後、高度成長期以来の日本社会の急激な変貌によつて、辺境の地の民俗を生きた生活の中に求めることはもはや不可能となった。その意味で、先に引用した新渡戸の「今にして我が「地方学」の研究に尽瘁するなくむば、絶を紹ぎ靡を免するの効、復た収むべからざるものあらむとす」という杞憂は、民俗にただならぬ関心を寄せる者として現代民俗学の隘路を先取りした言ともいえるであろう。

新渡戸と柳田の交流についての記録は、『柳田國男集』の中に散見する。それによると新渡戸は柳田の主宰する郷土研究会に加わり、何年かにわたつて自宅を柳田の郷土会の会合に提供していたという。柳田によれば、郷土会なるものの創立は明治四三年の秋で六十数回続いたが、新渡戸が第一次大戦後に欧米視察に出かけたのが、会が中断した主な原因であつたという。柳田は、郷土会への新渡戸の貢献を、「自編『郷土会記録』（『柳田國男集第二十三巻』に収録）で次のように述べている。

(会が中断したのは) 博士がその静かにして清らかな住居を、いつも会の為に提供せられたのみでは無く、又至つて注意深く参集者の世話を焼かれたので、誰も彼も少しでも早く、次の会日の来ることを願つて居たのが、もうさう云ふことが無くなつたからである。他の会員の家などで開かれた場合には、とてもあの様な行届いた亭主役は勤められなかつた。例へば会の食事なども、いろいろ皆の悦ぶやうな用意をして置いて、先生は我々が意を安じて食べるやうに、わざと名ばかりの会費を徴せられた。又成るだけ話がはずむやうに、色々の珍客を臨時に招いて置いて至つて自然に新らしい刺激を与へられた。(前掲書一〇八頁)

新渡戸の温かな人柄と細やかな配慮を彷彿とさせる文章である。そして柳田は、会における新渡戸の存在意義を、「此会の幸福だから言ふと、博士が色々他の方面に於ても、大切な人で無い方がよかつたのである」とまで述べている。柳田らの仕事に対する新渡戸の思い入れが並々ならぬものであつたことが窺えるであろう。

会場の提供以外に、郷土会の研究的作業に新渡戸がどのように関わつたかについては、残念ながら、管見では記録は乏しい。ただ柳田の、山に関する伝承を採録した「山の人生」という著作の中に、「以前新渡戸博士から聴いたこと」で「少しも作り事らしく無い話」として、次のような話が紹介されている。

陸中にのへ二戸郡の深山で、獵人が獵に入つて野宿をして居ると、不意に奥から出て来た人があつた。

よく見ると数年前に、行方不明になつてゐた村の小学教員であつた。ふとした事から山へ入りたくなつて家を飛出し、丸きり平地の人とちがつた生活をして、殆ど仙人になりかけて居たのだが、或時此辺でマタギの者の昼弁当を見付けて喰つたところが急に穀物の味が恋しくなつて、次第に山の中に住むことがいやにな

り、人が懐かしくてたうとう出て来たと謂つたさうである。それから里に戻つて如何したか、其後の様子は今ではもう何人にも問ふことが出来ぬ。（『柳田國男集第四卷』六五頁）

柳田の文章は、この話を枕にしてマタギに関する叙述へと展開している。この話は恐らく実話であつて、異次元世界に関わるいわゆる「怪異譚」ではないが、「殆ど仙人になりにかけて居た」「村の小学教員」は、ひとたび現実の彼方の世界に足を踏み入れたが、生活の匂いに惹かれて再び現実社会に戻つたのであり、その意味で異界と現実との間を往来したのである。こうした、近代化の最前線とは無縁の場所に密かに生き続ける非日常的な世界への志向は、前述した新渡戸の神秘的・超常的なものへの関心と重なり合う質のものであり、心の同一の源泉から湧き出たものであると言えるであろう。近代化の急先鋒を自負していた同時代の大方のプロテスタントたちとはおよそ趣を異にする、異界と紙一重にある辺境の世界に対する新渡戸の関心の一端を窺うことができると思ひ、あえて紹介した。

この他に、「新渡戸博士」の「家屋の發達に関する御説」について、柳田が「此村に於ては当らぬ点が多い」と反論したという記述や、新渡戸の『農学本論』への言及などもあり、研究作業の上でも柳田が新渡戸の著作に着目していたことが知られる。また、一九二二（大正一一）年、柳田が国際連盟の委任統治委員会で働いていたころの日記・「瑞西日記」（『柳田國男集第三卷』に収録）には、当地での新渡戸との邂逅の記述を散見する。ちなみに、国際連盟委任統治の委員として柳田を推挙したのは新渡戸であつた。なお、新渡戸の著述の方には、柳田に関する記述は、私は今のところ見つけていないので、残念ながら現状ではこのテーマをこれ以上深めることはできない。ここではただ、近代化の趨勢とは無縁に辺境に生き続ける民衆の生活文化へのまなざしを、新渡戸と柳田が共有していたことを確認するにとどめねばならない。

3. 新渡戸の植民地学の特質

植民地問題に関する新渡戸の見解を正當に理解するために、まず彼の植民地政策学の基本的な性格を押さえておきたい。

周知のように、植民地政策をめぐる新渡戸の言説に対しては、彼は生粋の帝国主義者であったという極めて手厳しい「断罪」と、これを真つ向から否定する見解とが拮抗してきたという経緯がある。そのうち最も広く知られたものは、故・飯沼二郎と新渡戸研究の第一人者・佐藤全弘との間に交わされた論争であろう。⁽⁴⁾ 先進諸国による植民地獲得競争が歴史の趨勢であった時代に、官人として植民地を統括する立場に立った新渡戸に植民地主義者のレッテルが貼られることは、ある意味で避けられないことであつたであろう。しかしそのような「きめつけ」をする前に、植民地政策をめぐる新渡戸の言論、彼の植民地観の本質、新渡戸が植民地に託した理想は実際にはどのようなものであつたのかをわれわれの観点から明らかにせねばならない。

一般に近代の植民地主義は帝国主義の所産であると理解されている。そして帝国主義とは、辞典的な定義に従えば、一九世紀後半のヨーロッパに発生し、海外に植民地を獲得してこれを維持・拡大する政策である、ということになるであろう。そこでは政治や経済、軍事の面はもとより、生活・文化の全般にわたつていわゆる宗主国が主導権を握り、最終的には宗主国と同化することが目指される。しかし、こうした定義に従う限り、植民地主義は新渡戸の関与するところではなかった。新渡戸は、各国は「nationality（民族精神）」の思想から植民を為しつつあるものであつて、決して人類の為に之を為しつつあるのではない」と述べて「政策として行はるる植民」を非としていることからわかるよう

に（『全集第四卷』四八頁）、政治的支配を目指す植民地政策は彼の与するところではなかった。では新渡戸自身の念頭にあった植民地観とはどのようなものであったのか。以下に、主として『植民地政策講義及論文集』（『全集第四卷』に収録）に基づいて、新渡戸の植民地論の性格を少しく探ってみたい。

本書のうちの『講義』の部分は、東京帝国大学における新渡戸の講義（大正五―六年度）を、当時学生であった矢内原忠雄が筆録したものに、高木八尺と大内兵衛のノートで補充したものであるという。これに植民政策に関する論文九篇を加えて、新渡戸の没後に標記の題で出版された。内容は、世界における植民地運動の歴史に始まり、植民の理由・目的・利益から「植民」という語の語源と定義、植民地の種類、その獲得方法や統治、土地問題、原住民対策など多方面に及んでいるが、『全集第四卷』所収の大内兵衛による解説に、新渡戸の講義はスタイルも内容も「ドグマを立てた説教ではなくて、多くの関連事項についての博引傍証であり、そういう事例による植民事実の説明」であったと述べられているように、ほとんどが関連事実の記述であり、それらに対する新渡戸自身の価値判断や是非の評価はほとんどなされていないのが特徴である。加えて彼の講義は「やさしいわかりやすい座談体」であり、体系化された植民地論ではなく、学生としては「毎時間植民についての雑話を聞いているような気持であった」（大内・前掲書）という。従って、新渡戸の講義に植民地経営に関する何らかの指針を求めて受講した者には、恐らく満足を与えなかったであろうと察せられる。事実大内による解説は、「そういう味（植民地に関する事実の列挙）を好む学生には特別にアトラクティブであったが、すべての学生をひきつけていたとはいえなかった」と続いている。

このように植民地政策に関する新渡戸の言説は、体系化され、その意味で抽象化された学ではなく、生活の万般に及ぶ具体的な事物に密着した事象や知見を重んじ、それらを披歴していくという基本姿勢に立つものであった。いまこのことを本論の論旨との関連で言えば、植民地に関する新渡戸の学問的関心の基底には、先に述べた「地方学」や民俗学に対する興味と同質の探究心が貫いているように思われる。新渡戸にとって先に述べたような民俗的な事実への志向

は、決して単なる余暇の慰みやその場限りの座興的なものではなく、彼の学問的探究心の深みに根ざしたものであり、民俗学的な手法は彼の学問のスタイルに通底するものでもあったと考える。実際、植民地関連の諸々の事実を記述する新渡戸の文体や筆致は、植民地に関わる万般の事実を知り尽くそうとする並々ならぬ（現代風に言えばマニアックとも言える）熱意を垣間見させるに足るものである。「土地を最も深く愛する者こそ土地の主となるべけれ」という主張も、こうした文脈で理解されるべきであろう。先に、かつて新渡戸は、田舎に関する事象百般を「學術的に研究して見たい」という意思を持っていたことに触れたが、その意思が日本ではなく、彼が官人として統括した植民地を素材として実現したと言ってもよいのではなからうか。

序でに言えば大内の解説は、新渡戸先生は講義のために十分な準備をされていたのだが、「それを隠してわざわざ平易に講義されたのであ」り、新渡戸の講義は雑談のように見えて「事實は、なかなかそんなことではなく、随分凝ったシステムチックな講義であったのである。そのことはこうして講義全体をまとめて通読するとよくわかる」のであると続き、新渡戸の講義が決して単なる博識の披歴ではなかったことを示そうとしている。しかし私としては、新渡戸の植民地学の真骨頂は、ドグマやシステム化ではなく、むしろ植民事実の集成にこそあったのであると素直に受け止めた

い。

このように、植民地に対する新渡戸の基本姿勢はいかなるドグマやイデオロギー的主張とも無縁のもので、基本的には植民地についてのあらゆる事実を知り尽くそうとする熱意こそが新渡戸をして彼一流の植民地学の構築に向かわせたのであり、このことは、新渡戸の植民地論を正しく理解する上で、まず確認しておくべき点であると考ええる。

しかしながら植民地に関する新渡戸の言説は、決して単に植民地に関する事実の記述に終わるものではなく、そこには当然、官人として植民地を統括する者としての理念的な目的があった。ではそれはどのようなものであったのか。新渡戸が植民地経営に託した理念を私なりに描き出してみたい。

『植民政策講義』の最終章「植民政策の原理」（『全集第四卷』所収）で新渡戸は、植民地の将来について次のような見解を述べている。地球規模の巨視的な視点に立てば、植民地問題はいずれ消滅するであろう。しかしながら、と彼は続ける。「政治的軍事的植民はなくなりても、精神的植民の問題は残るであろう」。そして精神的植民とは、「何処の思想が何処を征服するかといふ問題」であり、「何れの国が東洋の文化に最も貢献するか、何れの国が精神的に東洋を植民地とするかの競争」であるとし、さらに続けて、「植民は文明の伝播である」と結んでいる。「東洋の精神的植民地化」というテーゼ自体は、欧米諸国が中国に大学を設立したりするのに伍して日本も東洋各地に文化的な進出をすべきだ、という文脈で語られているので、一種のナショナリズムの高揚から出た言葉とも読むことができるであろう。加えて、「文明の伝播」という文言は、当然、西欧流の近代化とも解釈できる。「植民は文明の伝播である」、あるいは「精神的に東洋を植民地とする」という表現にこめられた新渡戸の真意は何であつたのか。

『植民政策講義及論文集』所収の第八論文「植民の終極目的」（『全集第四卷』所収）は、植民の問題を、人類的・地球的規模で自然との関係も視野に入れつつ論じたものである。その論旨はおおよそ次の通りである。

現今、各国はそれぞれ自国の領土拡張に汲々としている。しかしおおよそ人類万般の事業の中で、植民ほど終極目的が不明でかつ経営の難しいものはない。個人にせよ団体にせよはたまた国家にせよ、植民事業において「成功の月桂冠を戴けるもの」ははなはだ少ない。わずかに成功した者も、そのために「莫大の犠牲」を払わなかつた者はない。それゆえ、「個人或は国家がはたして此目的を達し得べきや大に疑懼の念なき」を得ない。さらに新渡戸は、クローマー卿なる人物の言葉を引いて言う、「かの帝国主義なるものは果して能く之を實現し得るや否や予之を知らず。世上之を唱道する輩も亦恐らくは然らん」と。

帝国主義的植民事業の実現が不可能な理由は、新渡戸によれば一つには、植民は人力だけで為し得るものではなく、そこに「自然力の支配」が加わるからである。例えば、地球の運行は周期的に旱魃と湿潤を来し、これが労働者の受容

を左右し、その結果、商工業にも影響を及ぼす。このように見れば、気候の変化は国家社会個人の計画よりもはるかに大きな力を以つて世界各国の植民を促すのではないか。そして、地球規模の耕作可能地の面積や人口の推移を統計的に示しつつ、次のように述べる。「然るに生民をして其故郷より未開の異郷に向はしむるものは恐くは人類の抗拒し得ざる力の存するに因りて初めて起るが如し。」生民が故郷を捨てて異郷に向かうのは、「人類の抗拒し得ざる力」、すなわち「自然」の支配をも受けるからである。そしてこの人力を超えた力の所以を問うとき、それは新渡戸においては必然的に「天父」に向かう。「思ふに全地球は畑地」であり、「之に人種子を蒔くもの」は、聖書に「天父は農夫なり」とあるように、「人類以外の一種の力」である。

しかしながら人類は決して拱手して自然の威力に身を任せるのではなく、全地球を積極的に人類が住むに適した地に変えていく。それは第一に科学の力による。科学の力を動員して地を改良し、初めて自然と人とは絶対的な関係、「無二の妙境」に入る。新渡戸はこの境位を「地球の人化」と呼ぶ。

しかし自然と人との関係においては、単に人力が自然に働きかけるだけでなく、人類もまた「受動的に森羅万象の感化を」受ける。そして新渡戸は、法華經の功德品などをも引きつつ、他日には人の「生」^{ライイ}の中に存在する「一種微妙なる作用」が自然環境と感応して、五官が現在には感受不可能なものを感受する、より高度の「理想」の境界に達することがないとは言えないであろうと、常識から考えればほとんど空想に近いようなことまで述べている。このあたりに、前述した超常的世界への新渡戸の関心と通底する発想を見ることができよう。

このように見てくると、新渡戸は現在進行中の植民地運動をいわば過渡的な道程と見て、その先に到来すべき地球規模（グローバル）における人と自然の関係の理想郷を見据えていたと言えるのではなからうか。さらに、そのような理想郷実現の具体的手段として新渡戸は、土地についての「世界社会主義の実現」を提言している。「之を要するに植民最終の目的即地球の人化と人類の最高発展とを実現するには少なくとも土地に就きては世界社会主義を要すべし。」

しかしながら新渡戸は、この「世界社会主義」に関しては、特に踏み込んだ言及はしていないので、それが実現された社会が具体的にどのようなものとして構想されていたのかということとはわからない。ここでは新渡戸のこの言葉は、彼の関心が当面の政治的軍事的な植民地争奪競争にはなかったことを確認する証左とするにとどめたい。

こうしたことに鑑みれば、「文明の伝播」ということは第一に、低開発地域における劣悪な生活環境の改善ということにあつたと見ることができるとは、彼は第四論文・「南洋の経済的価値」の中で「南洋」の生活実態として「殺兒の習慣」、「賊首の習慣」、「種族間の葛藤」、「奴隷の制度」、「低度なる生活と不摂生」、「風土病」などを列挙し、これらは文明の移植によつて消滅させることができる、と述べている。「若し南洋にして文明的政治行はれ、衛生並に生活状態を改めらるるに至らば、土着人の労働に関する今日の憂慮は自然に消滅するに至らん」と彼は言う。

しかしその一方で新渡戸は、植民政策においては「原住民の風俗習慣にはみだりに干渉すべきでない」（「植民政策の原理」）と主張し、宗主国の言語や宗教などの強制による宗主国との同化、政治的軍事的制圧などの弊害を説いている。ここからも明らかのように、新渡戸の意図は植民地の文化全般を宗主国のそれと同化させることではなかった。つまり新渡戸の言う「文明の伝播」とは、あらゆる地域が等しく劣悪な生活環境から解放され、「文明」を享受し得るような理想世界を構築することにあつたのである。このような社会の実現こそが、新渡戸の言う「文明の伝播」としての植民の目的であつたと考えたい。

しかし同時に新渡戸は、文明が人を虚弱にするのに対し、いわゆる「辺境生活」から「男らしい気風」を帯びた有為の人物が輩出すると言ひ、「リンコンやエマスのやうな人物は、とてもヨーロッパからは出まい」と述べている。その当否はともかく、彼の言わんとするところは、「辺境生活は吾人の殆んど忘れ失らんとする人間本来の性質を生き返らせるものであつて、人類の生活に辺境がなくなれば、人は慣習と伝統とに圧迫されて、つまらない人間となつて仕舞ふ」ということにあつた。（『全集第四巻』七二頁）この言葉は、先述した新渡戸の「田舎人」志向を想起させるが、

ここからも自明なように、新渡戸の言う「地球の人化」、「文明の伝播」とは、決して画一的な西欧的文明人によつて成り立つ世界を造ることではなく、多様な人々と文化が共存する世界を築くことであつたのである。

おわりに

ところで、多様な文化に生きる人々から成る世界を目指し、そこで人々が平和裡に共存するためには、お互いに他者の生き方を許容し合う「寛容」の姿勢が求められるであろう。ことに、土着の文化を尊重するために問われるのは、異なる宗教に生きる者同士の平和的な共存ではなからうか。そこで終わりに、新渡戸の信の世界のうちに見られる独特の「寛容」のあり方について一言述べておきたい。

新渡戸は、神を光源とする「内なる光」とそれを受ける人との関係について、次のようなことを述べている。「神の力が人の心に働き、更らに之れが外部に顕はるゝに至る有様は、人々の個性によつて異ならねばならぬ筈である。各人同一の神に、其の心が照らさるゝなれども、其の光が身の外に顕はるゝ時は、各々光の色が違つて見える。」（「宗教とは何ぞや」『全集第十卷』所収）これは直接にはキリスト者個人のあり方について言われたことであるが、この理解は当然キリスト教の枠を越えていく。新渡戸においては、正統的なキリスト教のようにキリスト教の固有性・絶対性が主張されるよりは、キリスト教もまた世界の諸宗教や哲学とともに、人をより高い存在領域へと導く道の一つと受け止められていた。人をそうした存在の高みへと導く力そのものは、決してキリスト教の専有物ではない。それゆえ、もしも宗教者としてこの高みに達した他宗教の人を互いに同胞として認めることを拒む者がいれば、それは彼が「まだ真理に達していないしるし」（「日本人のクエーカー観」『全集第十五卷』所収）なのである、と新渡戸は言う。

だが新渡戸自身が「内なる光」の中に見たものは、あくまでも「王の王」としてのキリストであり、彼の究極の目的は、キリストが建てた「神殿」に入ることにあつた。しかしそれは、キリストとその神殿が彼の心にとつて唯一の安らぎの場であつたからであり、そこが諸々の神殿の中で最高の場所であつたからではない。彼の心は、彼自身にとつての最高価値であるキリストによつて実践的に満たされることで充足するのであり、その価値の形而上学的、思弁的真理性を問うことは、彼の関与するところではなかつたのである。ここに、ユニテリアン主義や宗教折衷主義と、新渡戸の姿勢との根本的に異なるところがある。またここには、信仰の世界に「つきもの」の、いかなる「ドグマ性」もなく、他者との競争や緊張関係とは無縁の静謐な世界がある。ここには、価値観の多元化の時代に、諸々の立場が共存し得る可能性の一形態を見いだすことができるのではなからうかと考える。

本論は、二〇一三年三月二二日、東京女子大学で開かれた日本基督教学会における講演の発表原稿に加筆・修正したものである。また本論の作成にあたっては、論文構成の必要上、これまで学会や紀要等で発表したものや自著を引照している。部分的に既出の文章と重なっているところもあるが、全体としては今回新たに作成したものである。

なお、新渡戸のテキストからの引用は『新渡戸稲造全集』全二十三卷（教文館、一九六九—一九八七年）により、引用箇所については文中に記した。また、植村正久と柳田國男の文章からの引用箇所も文中に記した。

注

(1) 新渡戸のキリスト教世界のあり方が、絶対的超越者としての神と罪人としての人間の対峙という、いわゆる正統的キリスト教信仰のそれと異なるため、ここでは新渡戸稲造の「信仰」と言わず、あえて「信」という言葉を使った。

(2) 湯浅泰雄は「新渡戸稲造博士と超心理研究」(『宗教経験と深層心理』名著刊行会、一九八九年、『湯浅泰雄全集 第二巻』白亜書房、二〇〇〇年に収録)という短文において、新渡戸のこうした関心が「現代の超心理学の発展を予見したような言葉である」と述べ、新渡戸と超常能力者との接触例を紹介した上で、新渡戸の文章「靈的の現象」の、次のような結びの言葉を引用している。「何故にかく数百言を費やして此の事を述べたかといえは、一には洋行帰りの面白可笑しき土産話とする為でもあるが、尚その外に偽物多き中にも、真実なる靈的の現象もありそうであると思うからである。若しそれがあるとすれば、これほど尊い賜物は人類になかろう。……中略……現今のいわゆる科学學術の力によつて説明出来ぬものは世にない如く思うこそ、却つて迷信の甚しきものにして、現今の科学の方法を過信するものは、人間の理性の力を測り誤るものと言わざるを得ない。……後略……」(引用は湯浅前掲文より)

(3) 松隈俊子『新渡戸稲造』新装第一刷、みず書房、一九八一年、七一―二頁。

(4) 一九八一年八月二六日付「毎日新聞」夕刊に、故・飯沼二郎が「新渡戸稲造は自由主義者か」と題する論考を載せて新渡戸の植民思想を批判したのに対して、佐藤全弘が同紙同年の九月四日付夕刊で、「新渡戸稲造は「生粋の帝国主義者」か」と題する一文(『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館、一九八五年、四二八―四三三頁に収録)で激しく反論した。なお飯沼には、矢内原忠雄の場合と比較しつつ新渡戸を帝国主義下に植民政策を推進した官人として批判した論考「新渡戸稲造と矢内原忠雄」(同志社大学人文社会研究所『近代日本社会とキリスト教』一九八九年、『飯沼二郎著作集第五巻』未來社、一九九四年に収録)がある。

参考文献（注の中に記したものを除く。）

- 佐藤全弘編著『現代に生きる新渡戸稲造』教文館、一九八八年
太田雄三『へ太平洋の橋』としての新渡戸稲造』みすず書房、一九八六年
佐藤全弘『新渡戸稲造——生涯と思想』キリスト教図書出版社、一九八四年
佐藤全弘『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館、一九八五年
佐藤全弘『新渡戸稲造の世界』教文館、一九九八年
東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』春秋社、一九六九年